

金閣寺(鹿苑寺)安民沢

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真1 整備後の安民沢(西から)

金閣寺(鹿苑寺)には二つの大きな池があります。金閣(舍利殿)の前面に広がる鏡湖池と、金閣の北側の一段高いところにある安民沢と呼ばれる池です。この安民沢は左大文字のある大文字山から流れ出る水を受けとめる鏡湖池の沈砂池としての機能があります。大雨が降るとたくさんの出水があり、土砂が流入するからです。

金閣寺は平成6年(1994)に「古都京都の文化財」の一つとしてユネスコの世界遺産に登録されました。金閣は昭和25年(1950)に焼失しましたが、昭和30年に再建さ

れました。庭園を含む境内地は、文化財保護法により昭和31年に特別史跡・特別名勝に指定されています。現在、金閣を中心とした壮麗な庭園見学を目的に、外国の方も含め多くの拝観者があり、京都でも有数の観光地となっています。

金閣寺は臨済宗相国寺の山外塔頭寺院ですが、室町幕府三代将軍足利義満の北山殿がその前身で、寺名は義満の法号・鹿苑院にちなんでいます。さらに懸ると、北山殿の前には鎌倉時代の有力貴族西園寺公経が建立した西園寺と山荘北山第が築かれていました。西園

寺公経は朝廷と鎌倉幕府を結ぶ東中次として実権を握り、親幕派の筆頭公卿となり強大な権力を有していました。その財力でもって北山第を造営しました。元仁2年(1225)に北山第を訪れた藤原定家が、その造作は比類なしと『明月記』で絶賛しています。

足利義満は将軍職を子の義持に譲り出家した後、応永4年(1397)、この地を西園寺家から譲り受け、北山殿の造営に取りかかりました。栄華を誇った西園寺家も室町時代には衰退していたのです。舍利殿・寝殿を中心に多数の建築があり、



写真2 滝組 (西から)



写真3 木樋 (西から)

御所に匹敵するほどの規模でした。いくつかは西園寺北山第の施設を園池も含めて踏襲しながらも、大規模に造営されたようです。応永11年(1404)には、焼失した相国寺七重大塔が当地に再建されました(所在地不明)。応永15年(1408)、後小松天皇行幸の後、まもなくして義満が死去すると北山殿は変貌をとげます。四代將軍義持によって、数多くあった建造物は各所へ移築されます。また、応仁・文明の乱の折は西軍の陣地となり、舍利殿以外の堂宇は甚大な

被害を受けました。

鏡湖池は岸や中島に景石を多用している池泉回遊式庭園ですが、安民沢は景石も少なく、西園寺公経が鎌倉時代に造営した池と想定されています。安民沢は東西約80m、南北約40mの大きさがあり、東寄りに白蛇塚と呼ばれる中島があります。白蛇塚の上には五輪塔の笠を5段重ねた石塔が建っています。

平成5年9月から安民沢の渡漕工事が行なわれ、小さな滝組(写真2)や池底のヘドロに埋没していた景石及び南東部の排水用水門の近くで木樋(写真3)が発見されました。滝組は安民沢北東部の小川からの取水口で見つかりました。滝は、幅2.7m、奥行き2.3m、高さ0.7mを測ります。石材はいずれも北山石と呼ばれるチャートで、3石を階段状に組み両側に石を配置しています。部分的な調査ですが、滝組の上流には数石や景石は見られません。

木樋は逆台形の角材を削り貫き、板材で蓋をしたものです。木樋本体は下辺20cm、上辺26cm、高さ15cm、板材は幅30cm、厚さ7cmで、

長さ1.5m分検出しました。板材は鉄釘で留められ、木樋の端部に近いところに別の部材を取り付け流入口としています。木樋の両側に打ち込まれた杭は、流入口の栓を押さえる装置と思われます。木樋の周囲は白色粘土で巻かれていて、内部には土が入り込んでいました。木樋は南側の排水溝へ向かって伸びていますが、延長部分は確認できていません。木樋は当初、安民沢の排水溝として作られた暗渠が詰まってしまい、現在のような開渠に変更された可能性があります。

景石は北岸中央部の出島の汀と白蛇塚の護岸に11石が点々と配置されています。景石の石材は滝組と同様に、近辺で調達できるチャートが用いられています。南岸と東岸は松杭と横木の護岸です。

木樋は埋め戻され池底に沈み、滝組は一般公開のルートから外れていて、どちらも残念ながら見学することはできません。

安民沢は金閣の裏側となっている目立ちませんが、鎌倉時代の北山第のよすがを残している貴重な園池といえます。(前田義明)



図1 安民沢地形図